

配信日：2013年5月15日

史訪会WEBニュースレター

編集人：新地比呂志

E-mail: CQB02347@nifty.com(不明点はこちらへ)

● 新緑の候、皆様にはご清栄のことと存じます。また会員の皆様が課題とされている研究もお進みのことと存じます。

さて、2012年11月松田吉郎先生の編著により、史訪会の会員の論考集である『日本統治時代 台湾の経済と社会』が発刊されました。史訪会発展の礎が築かれたように思います。

さらに、この度、松田先生より中国大陸に関する歴史論考集を出版するという課題をいただきました。本年度の史訪会学術討論会で、新地から概要を提案したいと考えております。会員の皆様におかれましては、原稿執筆等、ご協力をお願いしたいと思います。

● 史訪会学術討論会のお知らせ（再）

1. 日程：8月4日（日）
2. 場所：兵庫県民会館（予定）
3. 内容 ①台湾史関連分野
②中国史関連分野
③日本史関連分野

● 投稿目次

- | | |
|----------------------|------|
| 1 インドネシア見聞記 | 黄麗雲 |
| 2. 台北飛行場における格納庫のはなし① | 井上敏孝 |
| 3 民国時期海南島の師範教育について | 趙 従勝 |

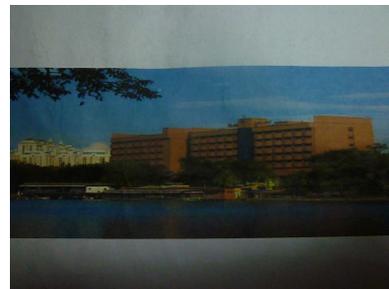
インドネシア見聞記

黄麗雲（新生医護管理専門学校 助理教授）

2013年2月13日(台湾旧正月初四)に台湾歴史学会の催行によるインドネシア歴史文化探訪団が一行20名で、桃園空港から東ツワにある首都ジャヤガタへ旅立ちに出発した。

筆者は此の度のツアに参加しながら、16世紀～20世紀にオランダ人VOCの統轄下にある「ジャヤガタ漢人端午龍舟賽」の開催場 Sunter Lake を目当てとして準備考察を試行してしまった。その話につき、筆者の本『近代龍神信仰 — 龍・船・水與競渡』と「東亜沿海の船舶航行 — 龍船と結ぶ」(『日本統治時代台湾の経済と社会』(松田吉郎編著)晃洋書房 201年8月)一文には触れたことがある。

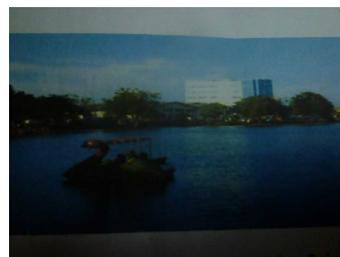
さて、台湾欣秀旅行会社のお世話になり、一日目に先述した Sunter Lake の前にある SUNLAKE HOTEL (Hotel Danau Sunter 写真一参照)に泊まることとなった。そして、翌日の朝8時前に Sunter Lake で龍船競漕を行っている練習ぶりを実際に自分の目で見た。そのときに撮った写真を別文で披露したいが、10年前から You can play with “Bebek Genjot” in the Sunter Lake. という写真をここでまず紹介してみる。Sunter Lake とその周りが現代化になってきたが、内質的には伝統的な龍神信仰の聖地として存在価値が変わらないと窺える。



ところで、14日に一行は唯一の蘇丹国を維持してある日惹市を尋ねに行ってきた。そこで王宮と避暑プールを見物したことがある。さすが、貴族の規模が見えるように龍のインパクトを免れないほどである。「6」の数字は雄と雌の二龍が合体した形と見え、「8」は逆に別々の二龍の原形であると王宮のガイドさんに教えられた。日惹市の蘇丹王宮が1968年に建てられた日を記念するために、印である雄と雌の木彫二龍が展示されている。

現在インドネシアの人種はインド人、アラビア人、原住民の外に、華人が五分の一弱を占めている。古くからインド教と仏教の影響がかなりあったと言っても、15世紀から華人式の龍神信仰に進入されて行った実情について研究する必要があると思う。聞く話によれば、2013年のインドネシア「漢人端午龍舟賽」は蘇門答臘で催行されるそうである。台湾チームが登場する予定であり、日

本籍の選手も参加する予定がある。それはそれは結構な龍船祭事と考えられる。



台北飛行場における格納庫のはなし①

兵庫教育大学大学院 博士研究生 井上敏孝

格納庫とは、「航空機を風雨や砂塵などから守り、内部で整備や補給を行う施設」のことである(1)。空港等を利用した際には、目にすることも多く、飛行機を収納し、修理・点検等まで行いうわば飛行機にとっての家ともいえる存在である。

この格納庫に関する内容について、今回から数回に分けて記事を投稿させて頂きたいと考えている。ただ、一概に格納庫と言っても、ここで取り上げるのは、台湾における台北飛行場に建設された格納庫である。具体的には日本統治時代、台北飛行場に建設された日本航空輸送株式会社の格納庫であり、明らかにしたいのは同格納庫の概要と技術的特徴である。戦前期の台湾では同飛行場に、同社の格納庫を含め2つの格納庫が建設された。そのうち日本航空輸送株式会社保有の格納庫は戦前期の日本帝国内で建設された格納庫の中でも有数の規模と建築学的特徴を持っていた。

以上のことを踏まえて今回から数回にわたって、同飛行場における日本航空輸送株式会社格納庫の建築学上の特徴を分析するとともに、同格納庫と同時期の日本内地主要飛行場格納庫とを比較分析することで、同格納庫の技術的特徴を明らかにしたいと考える。

そして数回の投稿を終えた暁には、まとめ編集し、あわよくば学会誌への投稿を試みたいという、ややよくばりな計画を立てている。厚かましいお願いであるが、また諸先生方の御意見・御感想及び御指導御鞭撻いただければ幸いである。

さて記念すべき連載(?)の第一弾として、今回は日本統治時代の台湾で建設され、同格納庫があった台北飛行場についてまずは取り上げてみたい。

台北飛行場は台湾で初めての公共用飛行場として1936年に完成した飛行場であった。

台湾本島では軍部によって屏東・鹿港・花蓮港・台東の諸地方に着陸場が開設された。しかしながらいずれの着陸場も、単に航空機の着陸に供するための最低限の設備しか有していなかった。そのため本島には軍部によって整備されたもの以外に「飛行場と稱するものがない状態」であった(2)。そこで台湾総督府は台北に空港を設置することとし、1932年に予算を計上、翌年には台北市東部の約14万坪の敷地を整備し台北飛行場とすることを決定した(3)。その後同飛行場は1935年同面積全部の整地を完了し、翌1936年に第一期工事が竣工している。そして内台間定期航路が開始したことで同飛行場は空港として使用されるに至った(4)。

ちなみに台北飛行場は1945年、日本の敗戦に伴い国民党政府の管轄化となり、台北

松山空港へと名称が変更された。そして現在は台湾の国内民間航空運輸の中心的な空港となっている(5)。

(1) 空港施設株式会社ホームページ <http://www.afc-group.jp/facilities/hangar.html>

(2) 「台北飛行場竣工」『まこと』第235号、1936年、p.8

(3) 熱帯産業調査会『台湾及南支南洋の航空』1936年、p.12

(4) 井上敏孝「日本統治時代台湾における台北飛行場建設」『建設の施工企画』NO.748、2012年、p.61

(5) 台北松山機場ホームページ <http://www.tsa.gov.tw/>

民国時期海南島の師範教育について

趙 従勝

今年、兵庫教育大学博士課程に無事に入学することができました。松田吉郎先生には、日頃より、ご支援を賜り感謝しております。何をもって感謝に報いればよいかというと、やはり多くの論文を書くことと考えています。博士論文のテーマを「中国・海南島の農業近代化一戦前・戦後の海南島農業調査・開発・教育をめぐって」としました。しかし、その中の海南島教育について、未だに不明のことが多く、現在、資料の蒐集と聞き取り調査の準備段階にあります。

今、思い返すと、大学時代に、「浅談民国時期海南島の師範教育」という卒業論文を作成していました。本稿においては、海南島の師範教育（学校と教師）を簡単に紹介いたします。以下は、「海南島の師範教育（学校と教師）」です。

海南島の師範教育は、清朝末期から始まった。海南島の最高学府は師範学校と中等学校であるため、大学に進学したい場合、北上し大陸に行くのか、海外に留学するしかなかった。清朝光緒31年（1905）海南島教育のもっとも発達している文昌県に初級師範学堂が創設され、専ら教師の育成にあたった。その後宣統元年（1909）感恩県に簡易師範学堂が創設され、小学校教師を育成していた。中華民国時期に入ると、清末の瓊崖中学堂が瓊崖中学に改名し、海南島の最初の新式中学となったが、当時海南島の小学校は2000校以上あるが、小学校教師が非常に不足していたので、瓊崖中学校に師範班が附設された。民国9年（1920）瓊崖中学校は広東省第六師範学校（通称“六師”）に名を改め、初・高

級小学校教師を育成することになった。民国17年（1928年）広東省教育庁が郷村師範教育を推進し、各県に郷村師範学校の創設を命じたことに応じて、臨高県・瓊山県・万寧県等は相次ぎ、学制三年の郷村師範学校を設立した。民国24年（1935年）“六師”は広東省立瓊崖師範学校に改名し、学校の設置等是不変であった。その後の1939年2月、日本軍の海南島占領によって、広東省立瓊崖師範学校は、瓊山の蒼苑村・湛江の西營・化県・韶關に転々として、抗戦後までに至った。戦後の1946年、海南島各地の師範学校は再建され、5校計1250人（中学校の附設師範生を含む）の学生がいった。

海南島の師範教育は、広東省第六師範学校（“六師”）を代表とし1937年の学生は700人以上にのぼったが、“六師”のほかに、東部の澄邁県と瓊山県の中学校に附設されている師範班しかなかった。したがって、それは海南島の師範教育程度の低さを意味していた。また、海南島教育は、中学校の中に師範班が附設され、師範学校の中に中学班が附設されているという新しい特徴を呈した。民国時期の海南島教育レベルの低下は、教師の不足がその原因の一つであった。全島小学校は1000校があり、教師は高等小学校（民国時期の学制は、初級小学校3年、高級小学校3年（小学校6年）、中学校4年（中学校・高校の分別なし）、大学4年）と初級中学校の卒業生に過ぎず、師範学校の卒業生が非常に少ない。瓊山県教師の学歴を見ても、民国23年（1934）全島の小学校410校の中、教職員は659人、その中師範教育系統の卒業生は80人、僅か12%を占めており、その他学校の卒業生は565人、全体の85%を占めており、非卒業生は14人、全体の3%を占めている。また、全県中学校5校の中では、教職員115人、高等師範卒業生は24人（20%）、大学或は専科の卒業生は41人（35%）、その他50人（45%）、大多数は大学・高等師範学校の卒業生ではなかった。民国時期の海南島師範教育を含め、全島の教育レベルは、中学校・師範学校の数と教師の数だけから見ると、非常に低い段階にあったといえる。

なお、海南島の師範教育の具体的内容（教育理念・教材・課程・単位・学生の進路等）の紹介は、次の機会に譲りたい。